

平成三十一年度入学試験問題（前期日程）

小 論 文

（中等教育教員養成課程 社会科専攻）

注意事項

- 1 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に縦書きで記入すること。
- 2 解答紙には、必ず受験番号を記入すること。

〔問〕

次の文章は、佐々木毅^{たけし}『民主主義という不思議な仕組み』（ちくまプリマー新書〇六四、二〇〇七年八月初版第一刷、二〇一二年十月初版第九刷）からの引用である。著者は、二十一世紀の日本と世界を創るために、政治と社会のあり方を探ろうとしている。これを読んで以下の問いに答えなさい。

何に対しても言えることですが、政治の場合にも最悪の事態を避けることと最善の状態を実現することを、はっきりと分けて考える必要があります。最善の状態を実現しようということばかりを考えて、最悪の事態に対して無防備になるのは愚かなことです。そこでまず、「あつてはならないこと」が起こらないように努力することが大切になります。大戦争や日本の人口の消滅などは、「あつてはならないこと」の最たるものでしょう。「あつてはならないこと」を防ぐためには積極的に政治に参加し、時には運動することも躊躇^{ちゆうちゆう}してはなりません。

しかし、「あつてはならないこと」が起こらないからといって、それで満足していいのでしょうか？

① 現実の社会には、グロ

バル化に伴う格差であるとか、環境・資源問題とか、「否応なしに対応しなければならない」必要不可欠な課題がたくさんあります。これこそ、私たちが日常的に対応しなければならぬ問題群です。ここでは基本的に、有効な施策に注力し、私たちが可能な限り国際的に有利な位置を占めるように導くことが政治の課題になります。当然、日本の現状を十分に踏まえた施策を講ずる必要があります。施策が本当に有効なのか、「カラ元気」を振りまいているに過ぎないのかについて、有権者は的確に判断する力が求められます。ここで必要なのは、政治は一時の興奮などによって左右されてはならないし、非合理的な政策は有効性を持たないという冷静な観点を持ち続けることです。独りよがりの、スーパーマンのような話に「いかれない」「騙^{たま}されない」ためには、政策の合理性、有効性に対する十分な関わりが必要であり、この関わりの強さがなければ長期的な社会の発展は望むことができないと、肝に銘ずることです。従って、政治は感情で動くように見えませんが、最後は「頭脳」である活動であることを決して忘れてはなりません。政治の世界には、有権者を「騙しかねない」（「騙そうと思っっている」というわけではないにせよ）人がたくさんごめしていることを無視することができないのです。

望ましい最善の状態への期待を持つことは、政治に関わる時には大切な資源です。もちろん、望ましい状態といっても、日本で考えられることは、アメリカや中国で考えられることとは違っているはずで、二十世紀の日本は、軍事力や経済力といった「ハード・パワー」で影響力を行使しましたが、この路線はそれぞれに破綻、あるいは一段落しました。おそらく、同じことを繰り返そうとしても出来ない相談だと思います。もちろん、日本の経済力が世界有数なほど規模が大きいかどうかは否定できませんし、これからの経済力の充実に取り組むことに異論はないでしょう。しかし大事なことは、社会あつての経済であり、経済力を活用する発想を失った社会や個人の将来は、そう明るいものではないということです（人口の減少はそれを示唆しています）。

私の考えでは、これから大切なことは、これまでと違った形で日本社会の新しいを作り出し、それをアピールすることです。そのためには前に述べたように、世界の人々の共通の関心事を世界に先駆けて達成すること、その意味で将来のための「モデル」を展開することが考えられます。ある時期、福祉国家といえはスウェーデンが取り上げられたように、二十一世紀の社会のモデルは日本であるというような、アピール力のある新しい社会を創ることです。つまり、力の大きさに代わって「モデル」で勝負するという構想です。

環境・資源問題はいうまでもなく、少子化・高齢化問題はこれから世界が直面する共通の課題です。特に、アジア近隣諸国はわずれ時間差をおいて、日本と同じ問題に直面することは必至です。日本には他のアジアの諸国にはない、いろいろな蓄積があります。歴史の中で競争するための秘訣は、「先取り」をする、つまり他よりも一歩でも早く進むことが考えられます。

もちろん、そのためには意識や仕組みの大改革が必要になります。例えば、一生朝から晩まで会社で働く以外に人生が考えられない、というようなことでは、二十一世紀型社会を構想することはできません。二十一世紀型社会は、各人がいくつかの違った生活や仕事を一生の間に選択し、複数のチャレンジをするような社会です。一言で言えば、今までの二倍生きることが覚悟し、それを積極的に受け入れることによって成り立つような社会です。定年になったら年金頼みの生活をするのではなく、協力し合いながら積極的に社会に対して貢献することを、当然と考える社会であり、いよいよ動けなくなるまで、社会の中に自分の居場所を求め、またそれが与えられるような社会です。

それには狭い経済的そろばん勘定を超えて、人間の気持ちを受け入れるような社会システムを構想することが必要であり、すでにさまざまなボランティア活動を現し始めています。これからは、一人の日本人の発するエネルギーを今までの二倍に高めて、高齢化問題に対処し、環境問題に対応し、あまつさえ少子化問題にも応対しようとする社会が必要なのです。人間が孤立し、家族の中でさえ居場所に苦勞するような状態を、完全に逆転させるのがこの二十一世紀型社会の構想です。つまり、人間は「社会的動物」であるということ、日本の人々がこれまで膨大な文化力、組織的能力を蓄積してきたこと、これを顕在化させることによつて一プラス一が二ではなく、三や四になる仕組みを考えること、これが二十一世紀型社会のアイデアです。

もし、日本でそうした二十一世紀を先取りする社会が現実のものとなれば、世界から多くの人々が押し寄せるでしょうし、日本で勉強したり、日本に住みたいと考えたりする人々も増えることでしょう。それは日本に対する国際的な好感を増やし、やがては尊敬につながることでしよう。現在、日本政府は観光を振興し、留学生を増やしたいと考えていますが、今述べてきたことは、^②「急がば回れ」ということわざが非常にぴつたりする構想ではありませんか？ これはほんの一例ですが、「可能性の術」としての政治の役割を他人事と考えるのではなく、広い意味で身近なことを考える余地を広げていってほしいと思っています。

(注) 問題作成の都合上、字句の加除を行った。

問一

著者が述べる傍線部②の構想とは、どのような構想であるのかを説明しなさい。解答は四〇〇字以内とする。

問二

著者は、私たちが日常的に対応しなければならない問題群について傍線部①のように述べている。現代社会における「グローバル化に伴う格差」及び「環境・資源問題」とはどのような内容であるのか、それぞれについて具体的に説明しなさい。その上で、それらが、なぜ、「否応なしに対応しなければならない」必要不可欠な課題であるのか、という点についても言及しなさい。解答は八〇〇字以内とする。

問三

著者が提案する二十一世紀型社会のあり方を踏まえた上で、著者の主張に対するあなたの考えを簡潔に述べなさい。解答は六〇〇字以内とする。